

中学生の自尊感情と被受容感のバランス状態からみた友人関係場面における怒り表現の検討

野瀬 めぐみ¹⁾, 前田 友美²⁾, 五十嵐 哲也³⁾

【要旨】中学生における友人関係場面における怒り表現について、自尊感情と被受容感のバランスの観点から検討した。その結果、怒りを抑制する傾向は、自尊感情と被受容感をともに中程度有している者が強く示していた。一方、怒りを適切にコントロールする傾向は、自尊感情の高低には左右されず、被受容感が高い者が強く示していた。怒りを他者に向ける傾向は、自尊感情および被受容感の双方ともに関連性が認められなかった。これらより、怒りをコントロールする能力の育成には、被受容感の役割が大きいことが示唆された。

キーワード：怒り表現、自尊感情、被受容感、友人関係場面

I. 問題と目的

中学生にとって、友人関係のトラブル対処は大きな課題である。平成20年度の文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、暴力行為の発生件数が小・中・高等学校のすべての学校種で過去最高の件数に上ることが公表された。内訳を見ると、特に中学校で発生件数が極めて高く、中でも生徒間暴力の多さが際立っている。

生徒間暴力がなぜ多発するのであろうか。そもそも、怒りは親しい人間関係の中で頻繁に起こる感情で、普段愛着や好意を持っている人物が怒りの対象になることが少なくないと言われている¹⁾。中でも友人関係は、教師や親とは異なり、利害関係も上下関係もない人間関係であり、本来的には安心して自分を出すことができる関係であると指摘されている¹⁾。このような関係性の中で生徒間暴力が多発する背景には、友人場面での怒り表現が適切に実行できないという問題があると考えられる。つまり、怒りをコントロールできず、暴力という形でしかそれを表現できないという可能性がある。これは、キレると言われる現象に象徴されており、「心理的・器質的要因に基づいて生じる、比較的強い否定的

な感情の喚起・表出を伴う攻撃行動」²⁾や「突発性攻撃行動および衝動」³⁾のように少年非行に見られる突発的な暴力行為等の攻撃行動として定義されている。

このような暴力行為による怒りの表出行動もある一方で、怒りの感情を抑圧し過ぎて、自分のネガティブ感情を表出しない傾向も見られる。崔・新井⁴⁾によれば、ネガティブ感情表出の制御を多く行う人は、低い自尊感情、高い抑うつ傾向、低い友人関係の満足感をもっていることが示唆されている。

以上のように、中学生の怒り表現に関しては、表現方法の適切さや表現しすぎてしまうという問題、さらに表現できずに精神的健康度を低めてしまうという問題など、多くの困難な事態が見受けられる。こうした中学生の怒り表現について、反中⁵⁾は、怒りの表出だけではなく不満型に認められる怒りの抑圧も考慮する必要がある、また、子どもたちが怒り喚起状況において自分を落ち着かせることが可能かという怒りのコントロールについても捉える必要があると述べている。反中⁵⁾の指摘のように、包括的な視点から中学生の怒りに関する現状を捉えなおす視点が必要とされている。

ところで、怒りや攻撃性に関しては、自尊感情との関連が従来から指摘されている。たとえば、杉浦・田中・山田⁶⁾は、自尊感情の低い状態や孤独感を感じている状態は、攻撃行動生起のレディネスが既に出来上がっている状態にあるともいえ、些細な刺激であっても攻撃を誘起しやすいと言及している。また、先に述べたよ

平成22年12月6日受理

¹⁾ 横浜市立恩田小学校

²⁾ 安城市立里町小学校

³⁾ 愛知教育大学養護教育講座

igarashi@auecc.aichi-edu.ac.jp

うに、怒りの抑圧に関しては崔・新井⁴⁾が実証している。一般に、自尊感情は高い方が良好な適応であり、人間関係の適応も良好だと言われ、適切な怒り表現に結びつくと考えられる。しかし、一方で、高い自尊感情をもつ者の中に攻撃的な特徴をもつ者がいるという見解がある。たとえば本間⁷⁾は、いじめ加害を自己報告した者は自尊感情が高いことを報告し、楡木⁸⁾は、反社会的な憧れをもつ中学生の自尊感情が高いことを指摘している。以上を踏まえると、高い自尊感情と適応は直線的に結びつくものではなく、不適応的な特徴をもつ者も混在していると考えられ、実際には自尊感情と適応との関連はいまだ不明な点が残されている。

そもそも自尊感情とは、self-esteemの訳語として使用されている。Rosenberg⁹⁾は「自己に対して肯定的、あるいは否定的な態度」を自尊感情とし、彼が作成した自尊感情尺度の合計得点を自尊感情の高さとみなした。こうしたRosenberg⁹⁾の見解について、遠藤・井上・蘭¹⁰⁾は、自分を「とてもよい」とし「very good」と考えるものと、自分を「これでよい」とし「good enough」と考えるものの2点の意味が内包されていると指摘している。また、遠藤¹¹⁾によれば、自尊感情とは自分だけを考慮してその価値を見出すものであり、他者や社会とのかかわりにおいて見出される価値の感覚は含んでいないものとなる。この指摘を受けて鈴木・小川¹²⁾は、「自分自身を自分の感覚・基準に根ざした上で肯定的に感じられている感情」を自尊感情と定義している。

したがって、自尊感情と適応・不適応との関連は、自尊感情と他者からの受容感との折り合いがついているかどうか、という見地から理論的に検討することができると考えられる。つまり、高い自尊感情は「自分の基準で自分だけを尊重すること」につながる可能性があり、その偏重が不適応的行動に結びつきやすいと推測される。そのため、自分の基準で自らを大切に思うだけでなく、他者からも自分を大切に思われていると感じているか否かという点も重要であり、この2つの点のバランスがよい状態が最も適応的なのではないかと考えられる。

他者からの受容は、これまでの研究において、被受容感という概念によって検討されてきた。被受容感とは、思春期の適応理解に重要で他者の中にあつての純粋な安心感に近いような概念^{13) 14)}であり、人間関係での全般的な適応感を指すものである。鈴木・小川¹²⁾は、特定の他者に限定せず「広く、人および社会から受け入れられている」感覚として定義づけている。その上で、

鈴木・小川¹²⁾は、被受容感と自尊感情からみたストレス反応・本来感との関連を検討し、同じ水準の自尊感情でも被受容感の水準の違いをみることによって、異なる適応上の特徴をもつことを示唆した。また鈴木・小川¹⁵⁾は、被受容感と自尊感情による思春期の適応理解の検討を社会的スキルとの関連から行い、被受容感を得ている者は自尊感情に関係なく、適切な社会的スキルが身につけていると認識しており、被受容感を十分に感じていない者は自尊感情に関係なく、社会的スキルが不適切だと認識していることが示された。

このように、中学生にとって自尊感情と被受容感とのバランスは適応上きわめて重要であると推測される。したがって、怒り表現という側面に関しても、自尊感情のみならず、被受容感との関連をも含めた観点から検討をし直す必要がある。しかし、これまで、自尊感情と攻撃性との関連は多く研究されてきたが、被受容感を組み合わせた研究は見当たらない。そこで本研究では、自尊感情と被受容感とのバランスが、中学生の友人場面における様々な怒りの表現にどのような影響を与えているのか検討することを目的とする。このことは、感情をコントロールできない中学生の増加が指摘される昨今、学校現場における支援を検討する上で意義ある知見が得られると考える。特に、怒り表現の不適切さのタイプによって、自尊感情を高めるのがよいのか、被受容感を高めればよいのか、あるいは両者を高めればよいのかなど、その違いを踏まえた具体的な支援方策の提示が可能になると考えられる。

II. 方法

1. 調査対象

A県内の公立中学校1～3年生、541名（男子280名、女子261名）を調査対象とした。回答数は518名であったが、分析では無回答の項目があるものを全て除外した結果、有効回答492名、有効回答率は95.0%であった。なお、有効回答の学年・性別の内訳は、1年生165名（男子86名、女子79名）、2年生156名（男子84名、女子72名）、3年生170名（男子83名、女子87名）であり、合計492名（男子253名、女子238名、不明1名）であった。

2. 調査内容

フェイスシートで学年、性別を尋ねた後、以下の項目を尋ねた。

(1) 自尊感情

鈴木¹⁶⁾の自尊感情尺度を使用した。本尺度は単一構造で、合計6項目から成る。4件法で実施した。

(2) 被受容感

鈴木¹⁶⁾の被受容感尺度を使用した。本尺度は単一構造で、合計7項目から成る。4件法で実施した。

(3) 怒り表現

友人に対する怒り表現について調べるために、反中⁵⁾の対人場面別怒り表現尺度の友人場面のみを使用した。本尺度は、「怒りの内向性」「怒りのコントロール」「怒りの外向性」の3因子構造で、合計12項目から成る。4件法で実施した。

3. 調査時期と手続き

2009年9月に、調査の趣旨と調査を実施するための生徒への教示法を内容とする「調査の手続き」と、調査用紙を担任教師に配布し、学級単位で担任教師の教示による集団法・自記式質問紙法で実施・回収した。無記名方式で行った。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の基本統計量と性差

自尊感情尺度、被受容感尺度、怒りの表現尺度の各下位尺度の性差についてt検定を行った結果 (Table 1), 男子は女子よりも自尊感情が高く、女子は男子より怒りの内向性が高いことが示された。また、女子は男子より怒りのコントロールが高い傾向にあった。

2. 自尊感情と被受容感による群分けの設定

自尊感情と被受容感のバランスについて検討するため、それらの高低によって調査対象者を群分けすることとした。

まず双方の尺度とも、対象者を高得点群 (以下、自尊感情についてはH, 被受容感については

hと表記する), 中得点群 (以下、自尊感情についてはM, 被受容感についてはmと表記する), 低得点群 (以下、自尊感情についてはL, 被受容感についてはlと表記する) の3つの群に分類することとした。分類基準は、各尺度の度数分布を参照し、対象者数が約33.3%ずつになるように分類することとした。

その結果、自尊感情尺度では、尺度得点2.83以上をH, 2.50~2.67をM, 2.33以下をLとした。被受容感尺度では、尺度得点3.00以上をh, 2.71~2.86をm, 2.57以下をlとした。

次に、以上の分類によって得られた結果を組み合わせて、9分類 (Hh/ Hm/ Hl/ Mh/ Mm/ Ml/ Lh/ Lm/ Ll; いずれも自尊感情尺度の分類を先に表記している。以下、同様の表記を行う) を暫定的に抽出した。その中でもどちらかにMもしくはmを含む「Hm/ Mh/ Ml/ Lm」の4分類については自尊感情と被受容感のズレを算出し、ズレの平均値 (Mean=.41) を超えるものは偏りが大きいと判断し、「Hl」か「Lh」のいずれかに含めた。たとえば、「Ml」でズレが0.41以上であった場合、より自尊感情に有意に偏っているとみなして「Hl」に含めた。そしてズレが0.41に満たないものは全て「Mm」に含めた。

以上の手続きを踏まえ、「Hh/ Ll/ Mm/ Hl/ Lh」の5つの群を設定した (Figure 1)。なお、これらの手続きは、先行研究¹⁵⁾に則って実施した。

3. 自尊感情および被受容感のバランスと怒り表現との関連

自尊感情と被受容感を組み合わせた5群によって、怒り表現の各下位尺度得点に差が見られるかを検討するため、群分けを要因とする1要因分散分析を行った。

その結果、怒りの内向性と怒りのコントロールにおいて有意な差が認められた (Table 2)。そこで、TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、怒りの内向性ではMm群の方がLl群より

Table 1 各変数の基本統計量と性差

	全体 (n=492)	男子 (n=253)	女子 (n=238)	t値	
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)		
自尊感情	2.66 (.66)	2.80 (.68)	2.51 (.60)	4.97 ***	男>女
被受容感	2.79 (.66)	2.77 (.72)	2.81 (.58)	-.53	
怒りの内向性	2.44 (.72)	2.35 (.71)	2.53 (.71)	-2.75 **	女>男
怒りのコントロール	2.53 (.61)	2.49 (.64)	2.58 (.57)	-1.77 †	女>男
怒りの外向性	2.53 (.69)	2.52 (.69)	2.53 (.69)	-.16	

† $p < .10$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

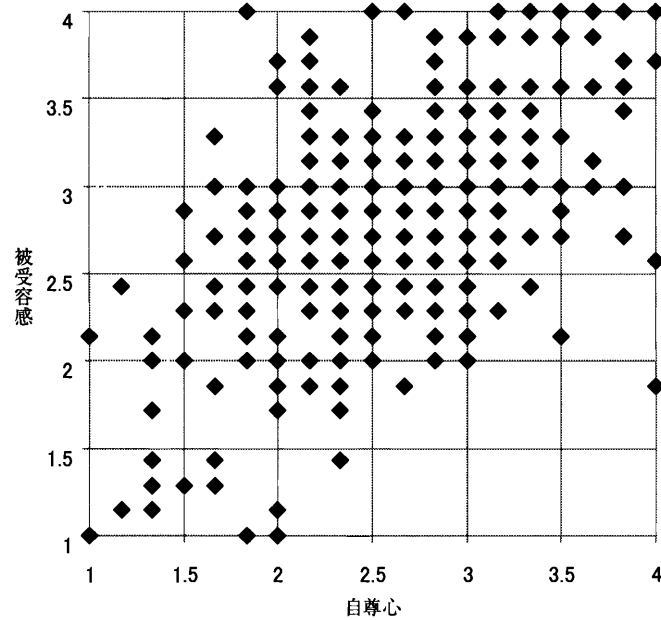


Figure1 自尊心と被受容感の得点分布

Table 2 自尊感情と被受容感の高低による群分けと怒り表現との関連

	Hh (n=171)	Hl (n=48)	Mm (n=81)	Lh (n=93)	Ll (n=99)	F値
	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	Mean (SD)	
怒りの内向性	2.40 (.68)	2.34 (.77)	2.65 (.67)	2.51 (.63)	2.32 (.83)	3.07 * Mm>Ll
怒りのコントロール	2.61 (.53)	2.48 (.62)	2.62 (.53)	2.62 (.54)	2.26 (.75)	7.34 *** Hh・Mm・Lh>Ll
怒りの外向性	2.50 (.65)	2.66 (.60)	2.51 (.72)	2.59 (.69)	2.46 (.76)	.92

* $p < .05$ *** $p < .01$

高いことが示された。一方、怒りのコントロールではMm群, Lh群, Hh群の方がLl群より高いことが示された。

IV. 考察

1. 性差について

自尊感情については、先行研究^{17) 18)}の多くにおいて、女子より男子の方が高いことが報告されており、本研究の結果と一致した。宮沢⁹⁾は、女子中学生の自己受容性の一般的な特徴として、自分の性格や容姿などのネガティブな面にはよく目を向け理解しているが、ポジティブな面を十分には理解しておらず、自己への不満は次第に強くなると報告している。このことより、女子の方が自己に対してネガティブになりやすく、自尊感情が低くなると考えられる。

被受容感に関しては、性差は見られなかった。被受容感は「他者から受容されている感覚」で

あるが、その対極にあるのは「自分がひとりであるという感覚」をさす孤独感²⁰⁾が考えられる。孤独感に関する先行研究²¹⁾では、中学生において性差が見られないとされる。このことは、本研究の結果と一致するのではないかと示唆される。この点については、今後、被受容感の獲得プロセスや発達差についても明らかにし、より詳細な検討を行う必要があるだろう。

怒り表現の性差に関しては、男子より女子の方が怒りの内向性が高いという結果が得られ、先行研究⁵⁾と一致した。塚本・濱口²²⁾は、女子は特定の集団を形成し、その集団で行動を共にすること、また中学生女子の友人関係は特に緊密性が強く、閉鎖的であるので、一度でも仲間のグループから外れた場合、そのグループに戻ることに難しくなることを指摘している。そのためグループから拒否されることに過度の不安を抱き、自分の感情を出し切れずにいる場合もあるだろう。反中⁵⁾が、女子は友人関係維持の

ために怒りを過度に抑圧していると指摘しているように、女子中学生は友人関係を重視しており、人間関係に気を遣い、友人に対する怒りの感情を抑制してしまうため、怒りの内向性が高いと考えられる。

また、男子より女子の方が怒りのコントロールが高い傾向にあった。怒りをコントロールするということは、対人関係においてたとえ怒りを感じるがあったとしても、対人関係維持のためにその表出を抑制し、適切な形で伝えようとする形態である。これは、社会的スキルに類似した概念であるとも考えられ、社会的スキルは一般に女子の方が高いことが知られている²³⁾。このことを踏まえると、本研究の結果は先行研究に一致していると言える。なお、大竹・鳥井・嶋田・山崎・狩野²⁴⁾は、攻撃性低減の一つの手段として、社会的スキルに焦点を当てることの有効性を報告している。このことから、社会的スキルを増大させることは怒りを適切にコントロールすることに結びつき、攻撃性が低下するとも示唆される。

一方、怒りの外向性に性差は見られなかった。東²⁵⁾は性差についてのメタ分析について概観した中で、一般的には男性の方が攻撃的であるものの、その差は時代とともに減少する傾向が見られたという。現代は、服飾などの外見的特徴²⁶⁾のみならず、性役割意識²⁷⁾といった心理的側面、さらには瘦身願望に基づく摂食行動²⁸⁾など、あらゆる側面で性差が減少していると指摘されている。そのことを考慮すると、怒りの外向性に性差が見られなかったという今回の結果は現代の特徴であると考えられる。

2. 自尊感情および被受容感のバランスと怒り表現との関連について

自尊感情と被受容感の得点分布を見たところ、中心部に集中しており、Hl, Lhが少ないことが明らかとなった。自尊感情が高ければ被受容感も高く (Hh)、自尊感情が低ければ被受容感も低い (Ll) 分布となっている。こうした全般的特徴はあるものの、さらに怒り表現のタイプを詳細に検討すると、以下のような可能性が示唆された。

(1) 怒りの内向性

Ll群よりMm群の方が高いという結果が得られた。鈴木・小川^{12) 15)}によると、自尊感情と被受容感が最も低いLl群は不適応的な特徴 (社会的スキルが低い、ストレス反応が高く自分らしさの感覚が乏しい) をもっていることが明らかとなっており、怒りの内向性が他の組み合わせに比

べて高いことも推測できる。しかし、本研究では、自尊感情も被受容感も適度にもっているMm群の方がLl群より怒りの内向性が高いという結果が認められた。

Ll群は、自分の価値を見出せず、受け入れられている感覚もないため、自分に対しても、周囲に対しても「どうでもいい」という無力感を抱いているような状態にあると推測される。一方、Mm群は、Ll群よりも自分を大切にしようという気持ちや、受け入れられている感覚があるので、友人関係を維持しようとし、自分の気持ちを抑えているような状態にあるのではないかと考えられる。大石²⁹⁾が指摘した「周囲との同質化」に示されるように、「みんなと同じでなければならず、同じであったほうがいい」という意識が働いている可能性も示唆される。怒りの内向性が高い状態は、自分の感情を制御しすぎ、精神的に不健康な状態を招くことも考えられる。Mm群は、まさにこの状態にあり、どのような場面で、どのような方法で怒りを制御するのが適切であるのかを援助する必要がある。

(2) 怒りの外向性

ここでは有意な差が認められなかった。杉浦・田中・山田⁶⁾は、自尊感情の低さ、孤独感の高まりが攻撃性と関連していたと報告している。一方で、自尊感情と攻撃性との間に明確な関連は認められなかったとする報告³⁰⁾や孤独感と攻撃との関係は示されなかったとする報告²¹⁾もある。このように、自尊感情および被受容感と怒りの外向性との関係については、研究結果に一貫性が見られない。したがって、今後さらなる検討が求められる。

(3) 怒りのコントロール

怒りを誘発した状況において、感情的な振る舞いをしないように自分を落ち着けるという怒りのコントロールは、怒り表現の中で最も適切な表現方法であると推測される。この点について本研究では、自尊感情の高低によらず、被受容感の高さが怒りのコントロールに関与しているということが示された。

被受容感と対極にあると考えられる孤独感について、その高さが引込み思案傾向に関係していること²¹⁾、自己表現に関するスキルの低さに関係していること³¹⁾が報告されている。また、「キレた」子どもの生育歴に関連する要因の一つとして、友人関係における孤立があるという報告もなされている³⁾。これらの先行研究を踏まえると、孤独感が高ければ、自分の感情を適切に表現することが困難になると推測される。すなわち、被受容感が高いと感情を適切に表出する

ことができると考えられ、本研究の結果は妥当であると示唆される。

松村³¹⁾によれば、怒りなどの情動の調整能力は、人とのかかわりの中で育まれることを指摘している。しかし、泣いても放置されたり、怒鳴り声や手荒な扱いを受けたり、人とのかかわりが少なかった子どもは、情動調整能力が育たないことも指摘している³¹⁾。そのような人とのかかわりの中では、「受け入れられている」という被受容感を感じられず、さらに適切な方法で怒り感情を対処することができなくなるであろう。つまり、良好な対人関係の中でこそ、被受容感が感じられ、怒りをコントロールすることにつながるのではないかと考えられる。

3. 学校教育への提言と今後の課題

(1) 学校教育への提言

以上を踏まえ、学校教育への提言を行うと、以下のように考えられる。

まず、怒りの内向性については、自尊感情も被受容感も適度にもっている者において高まる傾向が認められた。自尊感情と被受容感を高める支援を実施する中で、怒りの内向性が高まる可能性があることを理解する必要がある。

怒りの外向性については、自尊感情および被受容感とは無関係であった。このことは、自尊感情と被受容感をどれだけ高めても、怒りの外向性には影響しないということを示唆している。したがって、怒りを外に表出する生徒に対しては、他のアプローチによる支援が必要であると考えられる。

怒りのコントロールについては、自尊感情に関係なく中程度以上の被受容感をもっていることが大切だということが示唆された。本研究の結果を踏まえると、学校現場において自尊感情を高めるだけでなく、被受容感を高められるような支援をすることが効果的であると考えられる。

(2) 今後の課題

本研究では中学生を調査対象としたが、怒り表現の発達の側面について調査対象の年齢を拡大し、より詳細な検討を行うことが必要であろう。

また、被受容感については、実際の学校現場で被受容感を高めるための支援を行い、効果が得られるのかどうか検証する必要があるだろう。さらに、そもそも被受容感がどのように獲得されるのか、また発達的变化があるのかについて検討する必要がある。このことは、被受容感を育成する支援方法を明らかにする上で、重要な

視点を提供するものと考えられる。加えて、被受容感の感じ方には個人差があるのではないかと推測される。その個人差を生じさせる要因は何か、という点を明らかにすることで、個々の生徒の状況を踏まえた被受容感育成のための支援方法を見出すことが可能になる。

引用文献

- 1) 國分康孝 (1995) : 自分をラクにする心理学 PHP研究所
- 2) 宮下一博・大野久 (2002) : キレル青少年の心 北大路書房
- 3) 国立教育政策研究所 (2002) : 「突発性攻撃的行動及び衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究—「キレル」子どもの成育歴に関する研究— 文部科学省委嘱研究平成12~13年度『「突発性攻撃的行動及び衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究』報告書 国立教育政策研究所
- 4) 崔京姫・新井邦二郎 (1998) : ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.
- 5) 反中亜弓 (2008) : 中学生における対人場面別怒り表現尺度作成の試み 感情心理学研究, 15, 13-23.
- 6) 杉浦幸・田中純夫・山田泰行 (2007) : 中学生の反動的攻撃性の変動要因—認知・感情・経験的側面からの理解— 順天堂大学スポーツ健康科学研究, 11, 21-30.
- 7) 本間友巳 (2003) : 中学生におけるいじめの停止に関連する要因といじめ加害者への対応 教育心理学研究, 51, 390-400.
- 8) 楡木佳子 (2005) : 反社会的憧れを抱く中学生の帰属スタイルと自尊感情 犯罪心理学研究, 43, 17-35.
- 9) Rosenberg, M. (1965) : *Society and the adolescent self-image*. Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- 10) 遠藤辰夫・井上祥治・蘭千壽 (1992) : セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- 11) 遠藤由美 (1999) : 「自尊感情」を関係性からとらえ直す 実験社会心理学研究, 39, 150-167.
- 12) 鈴木真吾・小川俊樹 (2008) : 中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討 筑波大学心理学研究, 36, 97-104.

- 13) 杉山崇 (2002) : 抑うつにおける「被受容感」の効果とそのモデル化の研究 心理臨床学研究, 19, 589-597.
- 14) 杉山崇・内田宏明 (2004) : 学校カウンセリングにおける機能的な心理—福祉アプローチについて ある中学生の被受容感へのアプローチと現実的アプローチの論考 長野大学紀要, 26, 41-48.
- 15) 鈴木真吾・小川俊樹 (2007) : 自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討—社会的スキルとの関連から— 筑波大学心理学研究, 34, 91-99.
- 16) 鈴木真吾 (2005) : 自尊心と被受容感からみた思春期の適応理解—ストレス反応・本来感との関連— 日本パーソナリティ心理学大会発表論文集, 14, 107-108.
- 17) 川畑徹朗・西岡伸紀・石川哲也・勝野眞吾・春木敏・島井哲志・野津有司 (2005) : 青少年のセルフエスティームと喫煙, 飲酒, 薬物乱用行動との関係, 学校保健研究, 46, 612-627.
- 18) 松下加代子・村松常司・藤猪省太・平野嘉彦・吉田正 (2006) : 中学生の攻撃性とセルフエスティーム, 社会的スキルとの関係 東海学校保健研究, 4, 26-33.
- 19) 宮沢秀次 (1988) : 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.
- 20) 落合良行 (1999) : 孤独な心—淋しい孤独感から明るい孤独へ— サイエンス社
- 21) 金山元春・小野昌彦・大橋勉・辻本雄一・大井閑代・松井賀洋子・辻本育宏・吉田初子 (2002) : 中学生の社会的スキルと孤独感 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部教育人間科学関連領域, 51, 289-295.
- 22) 塚本貴文・濱口佳和 (2003) : 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響—中学生の場合— 筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 45-55.
- 23) 原由梨恵・村松常司・藤田定 (2006) : 中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム, 社会的スキルに関する研究 学校保健研究, 48, 158-174.
- 24) 大竹恵子・島井哲志・嶋田洋徳・山崎勝之・狩野裕 (1999) : 攻撃性と社会的スキルの関係—中学生用攻撃性質問 (HAQS) を用いて— 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 343.
- 25) 東清和 (1997) : ジェンダー心理学の研究—メタ分析を中心として— 教育心理学年報, 36, 156-164.
- 26) 北山晴一・酒井豊子 (2000) : 現代モード論 放送大学教育振興会
- 27) 内閣府 (2009) : 男女共同参画社会に関する世論調査 (平成21年10月調査) <http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-danjo/index.html>
- 28) 坂田知歌子・松井洋 (2001) : 男性における摂食障害傾向と関連する個人特性—女性との比較検討を中心に— 日本性格心理学会大会発表論文集, 10, 154-155.
- 29) 大石英史 (1998) : “キレル”子どもの心理的メカニズムに関する一考察 山口大学教育学部研究論叢第3部芸術・体育・教育・心理, 48, 109-121.
- 30) 愛知教育大学養護教育講座 (2001) : 自分の感情を抑制できない子どもに対する教育保健学的検討 (平成12年度教育研究改革・改善プロジェクト報告書) 愛知教育大学
- 31) 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 (1993) : 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究—孤独感と社会的スキルとの関係— 社会心理学研究, 8, 44-55.
- 32) 松村京子 (2009) : 豊かな情動を育む教育 児童心理, 895, 60-64.

謝 辞

本研究は、第一筆者と第二筆者が共同研究を行い、第三筆者が指導した平成21年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました中学生の皆様、ならびに教職員の皆様に心より感謝申し上げます。